Japan Society for Southeast Asian Studies (JSSEAS)

ものとして捉えることはできない。村と森とは差異化されつつも、ひとつの「住まう」空間として捉えられるべきである。

「文字のない少数民族」の変容——ベトナムのムオン人自身によるムオン語の表記と口頭伝承の記述

大泉さやか（一橋大学大学院生）

本発表は、ベトナムのムオン人が自らのローマ字表記によってムオン語を文字化し、口頭伝承を記述する動きを取り上げる。近代国家形成に伴う文字・正書法政策の枠外にあった、少数民族による自発的な自言語文字化の試みの意味を考察することを目的とする。

ムオン人（ベトナムの少数民族）のムオン語には、正書法も広く受け入れられた表記法もなく、表記の習慣もなかった（いわゆる「文字のない言語」）。並に 1960年代以降、ベトナム政府は少数民族言語に文字・正書法を策定する主張を出している。しかし、ムオン語は、ベトナム語と「同源」であることなどを理由に正書法が制定されず、国家による文字・正書法政策の枠外に置かれた。その一方で、ベトナム語・クオックグーによる読み書きを学んだムオン人の中から、自らムオン語のローマ字表記をはじめる者が出てきた。

ムオン人自身によるムオン語文字化の具体的事例として、1)タインホア省のムオン人で、後に口頭伝承収集家となったヴオン・アインの事例、2)発表者が定着調査を行ったホアビン省タンラク県P社の事例を取り上げる。

ヴオン・アイン（1944年～）は、1954年前後から、それまで口頭で伝承されていたムオン語祈祷文を、祈祷を勉強する父親のために自らのローマ字表記で文字化した。P社のムオン人祈祷師たちも、祈祷の勉強のために、ムオン語祈祷文を各人が各人なりのローマ字表記で文字化している。祈祷文を書き取ったノートはあくまで自分（ヴオン・アインの場合は父親）が参照する、記憶の補助のための個人的なノート・表記である。

ヴオン・アインが行っていた自発的「文字化」は、主に 1960 年代以降、「民間文学」収集政策と接続され、彼の表記は政策的文化保存の道具となった。1975年、ムオン語「祈祷文」をヴオン・アインらなりの表記で文字化した、『大地の誕生、水の誕生（ムオン語版）』が刊行される。これは、「民間文学」収集政策の中で、「祈祷文」を儀礼の場から切り離し、ムオン人の「文学」「叙事詩」として保存しようとするものであった。他人が「読む」ことを想定した表記を、言語学の非「専門家」なりに目指していたと見られる。

P社の事例においては、記憶の補助のための祈祷文ノートは、その後、祈祷師だけが読むことが許され、継承することができる「財産」「神器」としてのノートになった。新たな動きとして、P社では2007年に、忘れられつつあるムオン語歌謡を保存するため、ムオン語歌謡教室が開かれた。ここでも、「子孫に継承するため」、ムオン人がそれぞれのローマ字表記で歌謡の文字化を行い、書き取ったノートを「財産化」している。現在のところ、各人のノートが単独で流通する訳ではなく、音声（音声化された祈祷・歌謡）を伴って教えられているので、各人が各人なりに表記していても支障はないようである。

こうした文字・正書法政策の枠外に置かれたムオン語に対して、非政策的な理由から、「書き手」によって異なる非統一的な表記を、言語学の非「専門家」であるムオン人自身が与える意味を考察することにより、文字・読み書きの意味・あり方の多様性を理解することにつなげたい。

〈シンポジウム1〉

「東南アジア現代文学の眺望——作家、歴史、社会」趣旨説明

青山亨（東京外国語大学）

東南アジア研究の歴史を振り返ってみたとき、文学の研究は、その一角において、もっとも大きな流れでこそなかったかもしれないが、確固たる位置を占めてきた。東南アジア研究における文学研究は、文学固有の問題群を分析する試みであったばかりではなく、文学を通して東南アジアの社会を理解するための探求の試みでもあった。けだし文学は社会的な存在である人間の創造物であり、言語というコードの共有と読み手の存在を前提とする以上、これは当然のことであろう。インドネシアの作家プラムディヤは、文学の理解は人間の理解である、と述べているが、まさに東南アジアの文学研究は、文学を通じて東南アジアの社会、そこに生を営む人々を理解しようと努めてきたのである。

NII-Electronic Library Service